

新潟市水族館の管理に関する基本協定に係る

令和 1 年度 業務報告書

1. 入館状況について

令和 1 年度総入館者数 509,286人(対前年度比 98.1%)

[総括]

指定管理者として 5 年間の指定管理期間のうち、1 年目の管理運営を行った。充実した施設を活用し、豊富な経験・知識・技術を持った職員による適切な管理運営に心掛け、お客様サービスを第一に努めた。

集客施設での入館者数は、減少傾向を辿ることが一般的であり当館も例外ではなく、平成 25 年度のリニューアルオープン時の入館者数と比較すると年々減少傾向ではあるが、毎年大きな落ち込みは見られず、一定の水準を保っている。今年度はゴールデンウィークの 10 連休、冬期の暖冬・少雪等により 2 月末時点で対前年度比 103.3%と順調に推移していたが、3 月に入り新型コロナウイルス感染拡大の影響により最終的には 509,286 人、対前年度比 98.1%と昨年度を下回り、「公の施設目標管理型評価書」の評価指標である入館者数 510,000 人以上を維持することは出来なかった。

入館者数を月別でみると、4 月は 5 月 1 日の新天皇即位に伴いゴールデンウィークが最大 10 連休となり、加えて隣県に向け割引クーポン配布などの入館促進を図ったことで 4 月の入館者は 40,338 人、対前年度比 104.5%となり、まずまずのスタートとなった。5 月は最大 10 連休となったゴールデンウィーク期間中の入館者が対前年度を上回ったものの、その後の遠足による幼稚園・保育園の多くの団体が好天により水族館への入館を取り止めたため、最終的に 94.5%という昨年度を下回る結果となった。6 月は 6 月 18 日午後 10 時 22 分頃、山形県沖を震源とする山形県沖地震が発生した。新潟市内は震度 4 を観測し、一時、下越地方に津波注意報が発表された。施設に大きな被害はなかったものの、新潟県内への観光客の足が遠のいた影響もあり前年度比 97.0%となった。7 月は前月の山形県沖地震の影響が残り 91.4%と約 5,000 人減少した。最も多客となる 8 月は猛暑日が続いたものの、今年は祝日(山の日)とお盆休みが連続したことにより昨年度を上回り前年度比 104.6%となった。9 月は 7 月 29 日に生まれたカマイルカの仔の一般公開という話題性があり、特に週末は多くのお客様がカマイルカの親仔を観覧するために来館され、8 月に引き続き昨年度を上回る入館者数となった。上半期終了時点で前年度比 100.6%と昨年度とほぼ同数であった。下期スタートとなる 10 月は、体育の日を含む 3 連休に台風 19 号の接近があり、外出を控える動きが見られたが、佐渡で水揚げされたリュウグウノツカイを生鮮展示したことで入館者数を維持することが出来た。天候にも恵まれたこともあり対前年度比 112.0%と昨年度を上回った。11 月はほぼ前年並み、12 月は新天皇即位により祝日(天皇誕生日)が減ったことで入館者数も 1,600 人程減り、対前年度比 93.3%となった。1、2 月は記録的な暖冬、少雪によりお客様にとって、来館しやすい条件となり。特に県外からの入館者も多く来館され客単価も上昇した。1 月は約 6,000 人増、対前年度比 123.5%、2 月は約 5,500 人増、対前年度比 122.2%と大きく増加した。特に 2 月は平成 7 年度の無料招待事業を実施した 35,968 人に次ぐ入館者数を記録した。昨年度に引き続き、冬場の集客対策として、年間パスポート購入者へ館内のレストラン・ショップで使用できるクーポン券をプレゼントする「年パスキャンペーン」や成人の日企画「新成人及びその同行者の入館料免除」、「2020 年カレンダープレゼント」などのイベントを実施し、入館者促進を図った。2 月末時点で対前年度比 103.3%となり、この時点で昨年度を上回ると予想されたが、3 月に入り新型コロナウイルス感染拡大の影響で一般入館者は激減、さらに保育

園・幼稚園等の団体もほぼキャンセルとなり、稀に見る状況であった。入館者数は 13,419 人、対前年度比 34.5%、3 月としては平成 2 年のオープン以来、最低の入館者数となった。

依然として新型コロナウイルスの影響が続き、いつ終息するか全く予測がつかない状況であるが、開館を続けている間は、指定管理者として管理運営をしっかりと行っていきたい。このような状況下でも来館していただいているお客様がいるため、安心・安全に観覧していただけるよう努めていきたい。

パスポート購入者は、過去最多の購入者であった昨年度の 14,235 人から 330 人減少し、13,905 人のお客様に購入していただいた。パスポート購入者も新型コロナウイルスの影響により、3 月の購入者が激減し、結果的に昨年度を下回った。2 月までは例年どおり、積極的な年間パスポートの宣伝や、購入者へ館内のレストラン・ショップで使用できるクーポン券をプレゼントする「年パスキャンペーン」、館内出口付近に当日の入館券に追加料金をプラスすることで年間パスポートに切替ができるというポスター掲示やチラシの設置を継続して行い、多くのお客様から年間パスポートへの切替をしていただいた。パスポート所持者の平均年間来館回数が 1 人あたり 6.1 回であることから、パスポート購入者の増が入館者数の増に結びつくものと今後も期待できる。

申請や手帳による減免での入館者は、「身障者等手帳(対前年度比 101.8%)」「老人施設(対前年度比 89.5%)」「小・中学校(対前年度比 101.6%)」「保育園・幼稚園等(対前年度比 80.0%)」と新型コロナウイルスの影響で減少した団体はあるが、減免利用者総入館者数は、23,524 人と総入館者に占める減免利用者の割合は 4.6%となっており、当館の果たすべき社会的役割は依然として大きいと考えている。

毎月実施しているアンケート調査では、展示生物に対する満足度が 96.2%を確保しており、「楽しかった」「とても充実時間を過ごせた」「魚などとすごく近くてとても良かった」「水槽がきれいで見やすかった」「クラゲがすごくきれいだった」「詳しい解説があつて面白かった」などの感想が寄せられている。また、「館内の休憩所が多くとても助かった」「子どもが食べたり飲んだりできる場所や食べられるものがたくさんあつて良かった」「全体的に回りがやすく楽しめた」と展示生物以外でも好意的な声が寄せられている。なお、3 月は新型コロナウイルスの影響により、正確な数値が出せないと判断し中止した。

今後も、常におもてなしの心を持ち「来てよかった、また来たい」と感じてもらえるようなサービス提供を心掛け、新たなお客様の獲得とリピーターの確保に努めたい。

2. 施設の管理運営状況について

(1) 臨時開館・閉館及び開館時間の変更

[総括]

臨時開館・閉館及び開館時間の変更については、新潟市水族館条例に基づき適切に実施した。

例年行っている繁忙期における開館時間の繰り上げ・延長は、行った日すべて年間平均入館者数を超えており、市民サービスの提供という目的を十分に果たしたのではないかと考えている。

まず、ゴールデンウィークは新天皇即位に伴い最大 10 連休となったため、4 月 27 日(土)～5 月 6 日(月・祝)の間、全てで開館時間の 30 分繰り上げを実施した。県外及び帰省による入館者が増加し、水族館へのアクセス道路が大変混雑するため、入館者の時間帯ごとの平準化や、周辺道路の混雑緩和に有効であった。

次に海の日とその前日である 7 月 14 日と 15 日について開館時間の 30 分繰り上げを実施した。さらに

8月11日～14日のお盆時期について、開館時間の30分繰り上げ及び閉館時間の1時間延長を実施した。ゴールデンウィーク同様、入館者の時間帯ごとの平準化や、周辺道路の混雑緩和に有効であったと思われる。例年のお客様の入館動向を把握し、適切な開館時間の繰り上げ・延長を実施し市民サービスのため目的を十分達成した。

例年1月2日・3日は、市民サービスのため臨時開館を実施している。みなとトンネルからの人の流れも多く、マリニピア日本海の周辺道路は、護国神社の初詣客で、三が日は朝早い時間から混み合う。初詣客の入館促進を図り、正月開館も定着しているため今後も実施していきたい。

電気事業法第42条に基づく電気設備法定点検を3月5日・6日で実施した。従来からの休館日は「12月29日から1月1日」と「電気事業法に基づく電気設備法定点検実施のため3月の第1木曜日とその翌日」しかなく、今後も工事スケジュールを組むことが困難となる場合がある。

今後も開館時間の変更については、お客様の入館動向を把握し、適切に開館時間の繰り上げ又は延長を実施し、費用対効果を図りながら市民サービスに努めていくことが必要である。

(2) 展示生物について

[総括]

協定書の仕様書に謳われている約500種、20,000点の魚類、海獣その他水生生物の飼育展示規模を維持するとともに、展示内容の魅力の向上に努めた。

生物交換や採集等で魚類輸送専用車両を計画的に運用し、展示コンセプトに沿った沿岸性魚類や深海性魚類、温帯・亜熱帯性魚類等を搬入した。

飼育困難魚への飼育展示にも積極的に取り組んだ。他園館の協力を受けて、日本海大水槽にクロヘリメジロザメやスマを導入し、良好な展示状態を維持している。新潟県内各地の漁業協同組合の協力により、特に深海性生物の収集、展示に努めた。アバチャン、トクビレ、ガンコ、ナガツカ等の魚類の他、オキノテツルモツルや日本海固有種である両津湾産サラサベッコウタマガイを展示した。

また、飼育下で繁殖した生物を積極的に展示した。昨年度に引き続き、アカムツ(通称＝ボグロ)の人工育成技術開発に取り組み、育成個体を「#18」水槽に群れ(600個体)で常設展示した。ホトケドジョウ、シナイモツゴ、キタノアカヒレタビラ、キタノメダカを「信濃川水槽」に、クラゲ類、コウイカ、クロベンケイガニ、アカテガニ、シロボシアカモエビ、アカハライモリ、ホトケドジョウ、シナイモツゴを「育成室」に展示した。タツノオトシゴは親個体から第3世代となる育成個体を「アマモ場水槽」に展示した。7月には、当館初となるカマイルカの繁殖に成功した。それに伴い出産前後はイルカショーを休止したが、トレーニングの様子を解説しながら公開することで、入館者の理解を得ることができた。現在も母仔ともに良好な状態を維持している。また、3月に生まれたゴマフアザラシも良好な育成状態を維持している。フンボルトペンギンは11個体が完全育成している。

長期飼育してきたトドの雄(推定26歳)が老衰で死亡した。また、東日本で唯一の飼育個体であった高齢(18歳)のラッコも死亡し、再導入の見込みがないため展示終了となった。

「にいがたフィールド」では、冬期を除き「にいがたフィールドガイド」を月1回実施し、季節ごとの観察ポイントや自然繁殖したシナイモツゴ、キタノメダカなどの紹介を行った。

パスポート利用者を意識し、季節感のある展示更新を心掛け、1～2か月で内容を更新する企画展示を行った。サケ、カワヤツメ、サドガエル、ハクバサンショウウオ等、季節だけでなく、地域を特徴づける生物を積極的に導入した。

今後とも、開館以来の管理運営により蓄積してきた豊富な知見に基づき、創意工夫を重ね、展示生物の充実や、入館者に対する正確かつタイムリーな情報提供に努めていきたい。また、常に新鮮味のある展示を心掛け、リピーターにも十分満足してもらえるような魅力あふれる展示を行っていきたい。

(3) 通年事業の実施状況について

[総括]

① ペンギン解説

ペンギン散歩道(夏期はペンギン海岸)でペンギンが歩く様子等を見ながら、分類や生態、生息地の環境、フンボルトペンギンが絶滅に瀕している背景、水族館における域外保全活動・繁殖の実施等について解説している。実施場所は屋外観覧導線に面しており、およそ 10 分の解説時間の中で気軽に立ち寄って解説を聞き、満足すると立ち去る来館者も多く、実施規模の割に参加人数の多いイベントとなっている。

② イルカショー

時刻を定めて解説を行う行動展示で、高い展示・教育効果が期待される。

水生哺乳類の自然史や環境との関わり、飼育下の健康管理、トレーニングなどを解説し、来館者の水生野生生物への理解を促し、環境保全への関心を高めてもらうことに目的をおいている。

「イルカショー」では、ハンドウイルカ 2~3 頭、カマイルカ 1~2 頭を交代で用いて 1 日に 4~5 回、1 回約 15 分のイルカショーを行った。イルカの種類、体の特徴、認知、行動能力などを解説し、楽しみながら自然に学べるイルカショーを心がけた。また、ショーへの参加者を最大 5 名に増やし、体表やヒレ、歯、呼吸(鼻)などに触れたり、間近で観察しその感想を伺う内容とした。参加者の生の感想を伝えることで体験をショー観覧の来館者と共有し、より多くの方がイルカを理解することになっていることであろう。多客期は第一回目のショー時間を早め、来館者が分散し快適にショーを楽しんでもらえるよう配慮した。毎回のイルカショー後には、イルカに関する疑問が解消できるよう質問受付を実施した。令和 1 年 7 月にカマイルカが出産したことに伴い、屋内プールで開催する冬季のイルカショーは、母仔の解説とし直後にドルフィンスタジアムでジャンプなどを含めたトレーニングをセットとして行った。これにより母仔の安全を確保しつつ体の解説や仔の成長を伝えることができ、かつジャンプが見たいという来館者の欲求を満ち満足感を得られたと考える。

毎月実施しているアンケート調査では、概ね高評価をいただいている。

③ マリンサファリ給餌解説

ドドを用いて 1 日 2 回、形態や生態、野生の状況、人との関わり等についての解説を実施した。体重 1 トン近い大型のオスを直接コントロールして飛び込みなどをさせる園館は他にほとんどなく、来館者から大変好評を得ていたが、8 月 1 日にオスのドドが老衰で死亡してからは、小型のメス 2 頭に給餌しながら解説している。

④ ひれあし類解説

午前のマリンサファリ給餌解説終了後、マリンサファリ内でゴマフアザラシとカリフォルニアアシカに餌を与えながら解説した。アザラシ科とアシカ科の形態の違いなど、ドドの解説では伝えることができない

鰭脚類の分類を中心に解説を行っている。

⑤ 日本海大水槽解説

水生生物や海洋環境に関する知識の普及を目的に、日本海大水槽前で飼育員が解説を行った。展示生物の紹介から水族館のしくみまで多角的な情報を伝えるプログラムとして取り組んでいる。今年度は、新規に飼育を開始したクロヘリメジロザメの紹介を解説に取り入れた。海洋生物について理解を深めてもらう良い機会であったと実感している。

⑥ 磯の生き物解説

磯の体験水槽で、生物を1日1回、解説を交えながら近くで観察してもらう構成としている。多客時はブース内でマイクを使用し、参加者に声が届くように努めている。観察用プラケースの貸し出しを行い、生物をいろいろな角度から観察できるような工夫をした。また、触ってみたいけれど少し怖くて触れないという来館者には、職員が触って感触を伝えるなど、多くの来館者に興味を持って生物に接してもらえるよう心掛けた。来館者と直接対話するプログラムとしたことで、生物の扱い方や、生息環境への理解を深めるのに有効であったと実感している。

⑦ アクアラボ体験

アクアラボで水生生物に対する知識と理解を深めることを目的に、顕微鏡・カメラ・大型液晶モニターを用いて、観察や解説を行った。参加者の年齢に合わせて季節感を考慮した日替わりのテーマに沿って実施し、たいへん好評であった。

今年度は、新たに4タイトルを追加して実施し、水生生物の知識普及に積極的に務めた。

⑧ ラッコの給餌解説

1日1回、ラッコの給餌に合わせて形態や生態、国内の飼育状況、野生の状況について解説を実施した。解説後には毛皮に触ってもらい、野生個体減少の原因になった乱獲の理由を、毛皮の手触りから実感してもらった。東日本では唯一の希少な展示であったが、3月23日に高齢のため死亡した。現在は野生からの入手ができず、国内で飼育下繁殖もしていないため、残念ながらラッコの展示は終了することになった。

(4) 生物展示関係イベント等の実施状況について

[総括]

① 企画展示「海の生き物を集める-水族館の収集活動-」

当館が行っている海の生き物の収集活動に焦点を当て、採集に使う道具の工夫や、生物を輸送する技術などについてわかりやすく紹介した。海で採集された生物の生体のほか、採集する生物に合わせて作製した網、輸送時に使用する保冷ボックス、輸送用に作製したタンカなど、実際に使用している道具も展示した。また、活魚輸送専用車両の4分の1スケール模型を展示し、生物を状態良く運ぶための仕組みをわかりやすく紹介した。パネルでは、採集や輸送技術のほか、当館の収集活動によって発見された新種生物や繁殖・生態研究の成果などについても紹介した。水族館の収集活動を知っていただく良い機会となった。

② 企画展示「身近に潜む海のキケン生物」

海に生息する生物の中で、毒やトゲ等を備え、ヒトにとって危険とされる生物を題材として企画展示を実施した。食べると中毒を引き起こす生物や刺毒を持つ生物などの生体や標本を展示し、毒を持つ生物のリスト、自然界での役割、毒の症状、応急処置の方法などをパネルで紹介した。また、毒を持たなくても鋭い棘や鋭利な形状をした殻を持つ生物なども展示し、生物の知識だけでなく、海に行く際の安全な対策などについても紹介した。新潟の海に生息する危険な生物について、種類や主な生息場所などを紹介したリーフレットを配布し、海洋生物と触れ合う際に潜む危険についての知識普及にも努めた。海洋生物への関心を深めていただける良い機会となったと考えている。

③ 企画展示「新潟の淡水エビ・淡水カニ」

新潟県に分布する13種について、生態や現状、外来種の問題、国内初となった当館での繁殖実績などを紹介した。淡水エビと淡水カニを紹介する企画展示は当館では初めての試みであり、県内での入手が難しいと思われた種、初めて飼育する種などもリストに含まれていたが、これまで培ってきた採集や飼育の技術を用いることで、県内に生息する淡水性エビ・カニ類11種を展示することができた。淡水エビと淡水カニは、普段あまり注目されることがなく、また、もともと知られている種が、北アメリカ大陸南部原産の国外外来種「アメリカザリガニ」という現状がある。環境破壊や外来種により激減しても気づきにくい淡水エビと淡水カニにも目を向けてもらう企画展示を実施したことで、来館者に新潟県内の陸水環境の現状について知ってもらうことができた。

④ フォトコンテスト受賞作品展

応募期間：7月1日～11月11日(応募点数 346点)

展示期間：12月13日～2月24日(展示点数 141点)

今回が6回目の開催。募集期間を初夏から秋にかけてのオンシーズンとし、入賞作品の展示を冬期のオフシーズンにすることで、長期間に渡っての話題づくりとなることを想定して実施した。応募点数も昨年度とほぼ同数の346点(昨年度341点)であり、本企画が定着してきたと考えられる。

⑤ 特別展示「リュウグウノツカイ標本展示」(10月・2月)

リュウグウノツカイの標本を期間限定で2回展示した。1回目は、2019年10月6日に佐渡で採集された全長約2mの個体を、10月11～13日の3日間、2回目は、2020年2月13日に新潟市西区小針浜の海岸に死亡漂着した全長約4mの個体を、2月14～16日の3日間展示した。展示はアクアラボ前の屋外通路で実施し、漂着場所や体の測定情報をパネルで紹介した。リュウグウノツカイは希少性や独特な体色や形態、おとぎ話を連想させるような和名などを持ち合わせているため、注目度の高い生物である。公式ホームページで積極的に情報を公開したことで、閑散期の来館者数の増加に繋げることができた。普段見ることが出来ない深海生物の特別展示を積極的行なったことで、海洋生物への関心を深めていただける良い機会となった。

⑥ いきもの教室 (自主事業)

4月から3月まで、全10回のプログラムを計画し9回を実施した(3月21日の「生きものホネホネ観察」は新型コロナウイルス対策で中止)。10回は全て違うプログラムとし、対象年齢を小学生以上に設定した(4月「イルカ」、9月「プランクトン」、11月「カエル」、3月「ホネホネ」は小学4年生以上)。

実施した 9 回の平均応募率は定員に対して 257.4%で(昨年 291.4%、一昨年 189.6%)、応募が多かったのは、4 月「イルカ」310%、5 月「クラゲ」270%、7 月「ペンギン」290%、7 月「貝の標本」595%、1 月「魚拓」300%であった。昨年度は 2 回のプログラムで定員割れがあり、また 1000%を超えるプログラムも 1 回あったが、本年度は最低 116%、最高 595%と定員割れもなく、バランス良く募ることができた。

昨年 4 月に実施し定員割れした「プランクトンの観察」は開催時期を見直し、本年度は 9 月に実施して応募率は 125%であった。地先海岸での採集を伴う内容で、募集時期を肌寒い春先から夏に見直した結果と考察される。募集の告知は「市報にいがた」「当館ホームページ」「館内での募集」「ラジオやテレビ番組内マリンパイアインフォメーション」「イベントポスターにチラシを同封し市内の小学校に配布」などで行った。なお 9 回のアンケート結果を見ると、96.1%の方が「とてもおもしろかった」「おもしろかった」、85.1%の方が「今度またぜひ参加したい」「今度また参加したい」と回答し、参加者の満足度は高かった。

⑦ にいがたフィールドガイド

入館者を対象に、月 1 回約 20 分間、4 月から 11 月に実施した。にいがたフィールドを歩きながら案内し、生息する動植物と当館で取り組んでいるシナイモツゴなど絶滅危惧種の生息域外保全などについて解説した。観察できる動植物が季節によって異なることや情報の補足などに用いるため、リーフレットを作成し、終了時に配布した。にいがたフィールドの魅力をもっと深く知ることにより、身近な水辺環境への関心を持ってもらう機会になった。完成されたプログラムとして今後も継続を考える。

⑧ ゴマフアザラシ愛称募集及び「ミミイ」命名式

3 月 31 日に産まれたメスのゴマフアザラシの愛称募集を 4 月 27 日から 5 月 12 日まで館内で実施した。3,517 通 1,813 種類の応募があり、館内で検討した結果「ミミイ」に決定した。「ミミイ」と名付けてくださった 51 人の方にはミミイ記念ハガキとシールをプレゼントした。また 51 名の中から代表 2 名の方を選出し「命名式」(7 月 20 日)に招待して記念品の贈呈と飼育エリアでミミイの観察と解説を行った。

⑨ ペンギンの日イベント

4 月 25 日の「世界ペンギンの日」に合わせて、直近の土曜日と日曜日の 2 日間、もっとペンギンを知ってもらえるイベントを開催した。土曜日にバックヤードを含むガイドツアーを 2 回実施し、日曜日にアクアラボ内で標本・当館の繁殖の取り組みを展示し、記念品作製・クイズコーナーを設置した。ペンギンという生き物自体はよく知られているが、生態や形態、野生の状況などはあまり理解されていないことが多い。ガイドツアーやクイズを通して楽しみながらペンギンについて知ってもらい、ペンギンをきっかけとして生物の生息環境に関心を持ち、さらに身近な自然環境に興味を持ってもらえればと考えている。

⑩ 世界カワウソの日イベント

5 月の最終水曜日が International Otter Survival Fund により「World Otter Day」と定められていることから、カワウソ類を飼育する国内約 40 園館と歩調を合わせる形で実施した。今年は新たな試みとして、カワウソと生息場所と餌生物の関係を考えるネイチャーゲームを実施した。また、水辺の小動物エリアのユーラシアカワウソ水槽で生き餌を与えて捕食行動を見ながら解説、ア

クアラボ内でラッコとカナダカワウソの毛皮触り比べ、当館飼育カワウソ類3種の糞のにおい比べ、ぬり絵・書籍・記念品作製コーナーを設置して解説し、カワウソについての知識を深めてもらうことを目的とした。毎年実施して、より多くの方が身の周りの自然環境について考えるきっかけになればと考えている。

⑪ 田んぼ体験（自主事業）

本プログラムはにいがたフィールドの田んぼで田植えから稲刈り、脱穀までの稲作の体験と収穫したワラを使ったワラ細工体験を行うものであるが、今年度は9月29日の稲刈りが台風接近による荒天で中止となった。当館の事前募集プログラムとしては唯一の4歳以上という幼児も対象にしたプログラムであることから幼児を含む親子の応募が多かった。応募数は定員10組程度のところ39組の応募があった。

田植え、稲刈り(中止)、稲架がけ(中止)、脱穀、ワラ細工と稲作の一連の流れを体験でき、また、そこにいる生きものと田んぼとの関係なども観察できることから、環境教育としても十分機能していると考えられる。

⑫ 野外観察体験会「スナガニ野外観察会」(自主事業)

水族館の地先海岸の砂浜にて、スナガニをメインに観察・採集を行い、どのような生き物が砂浜を利用しているのか理解・興味を深めることを目的として実施した。巣穴構造を理解してもらうために、石膏で型を取るなどの工夫をした。身近であるが、意外と知られていない生き物について紹介することで、地域の自然環境に興味を持って接してもらうきっかけを作ることができた。有意義なプログラムであったと実感している。

⑬ 野外観察体験会「川のいきもの観察会」(自主事業)

新発田市荒川川にて、魚類や甲殻類の採集・観察を行った。水深が浅く、生物が多く生息する場所を採集場所として選定したため、小学生の参加者でも安全に楽しく採集してもらうことができた。自ら採集し、観察する体験を通し、身近な河川の自然環境について興味を持ってもらえたと考えている。

⑭ ナイトツアー（自主事業）

8月に1回20名の定員で4回実施した。合計定員80名のところ、417名の応募があった。参加費が大人2,000円、小人1,000円と、当館のイベントの中では高額な部類に入る企画であるにもかかわらず、ナイトツアーの人気は高い。通常観ることのできない閉館後の夜の水槽の様子を観察してもらい、昼と夜での生き物の活動の違いや外観の変化等をツアーガイド形式で解説し、水生生物の生態や自然環境への関心を深めてもらった。完成されたプログラムとして継続を考える。

⑮ スナガニ調査

水族館の事業のひとつである野外生物調査としてスナガニの調査を行い、採集・観察方法や体のつくりなどについて解説し、当日募集した参加者に興味を持ってもらうことを目的とした。身近な生物であるスナガニについて知ってもらうとともに、水族館の活動も合わせて知ってもらうことができたと考えている。

⑯ イルカバックヤードミニガイド

毎年行っているプログラムである。しかし今年はカマイルカの出産があり、観覧動線や人員の確保などの理由により、開催日を7月～1月の第1土曜日から10月～1月のイベントが重ならない土曜日に変更した。これによるクレームは無く、また次回開催日が近いこともあり落選者への案内がしやすかった。参加希望者は5日間で359名135組と多く、当選者85名32組の約4倍を超えた。プログラムとしては昨年の反省を生かし、15分延長した45分間としたことにより、ゆっくりとした見学と詳細な解説が可能となり、アンケートによる参加者の評価は「面白い」・「とても面白い」が100%であった。またアンケート記入と解散場所が親仔カマイルカを収容していた屋内プールであったため、アンケート後カマイルカの仔に関する質問も多数寄せられた。イルカショーでは伝えきれない情報を、直接見たり触れたりしながら伝えられるプログラムであり、今後も継続して行いたい。

⑰ 大人向け写真教室（自主事業）

フォトコンテストと連動する形で実施した。水族館での楽しみのひとつとして写真撮影があるが、アクリルガラス越しであることや暗い中での撮影のため、綺麗な写真を撮影することはとても難しい。しかし、これらの難しさはカメラの設定や撮影する際のちょっとした工夫によってある程度改善することができる。それらの「工夫」について当館職員がレクチャーすることで水族館での楽しみ方の幅を広げてもらえたと考えている。

⑱ いきもの絵本読み聞かせ会

絵本の読み聞かせを通して生き物への興味を引き出し、水族館での楽しみ方も紹介する目的で行った。実施は閑散期の12月～3月の第2金曜の計4回、くつろぎライブラリーで行った。乳幼児と母という組み合わせが多かったため、興味を引き出すための工夫（寸劇や小道具）が必要となり、準備にかなりの時間を要した。参加者への聴き取りでは、「面白い」「また参加した」というご意見をいただいた。なお、最終回は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止した。

⑲ 育成室開放

生物育成の成果は本館地下の育成室で通年紹介している。育成室は観覧通路から室内を見学することを目的とした部屋だが、室内で直接観察したいという要望は多い。そのため、毎年、育成室に入室する機会を設け、間近で観察しながら職員と対話できるプログラムを実施している。本年度は、1日1回30分間、12月から2月の第3土曜日に実施した。3月も予定していたが、新型コロナウイルスが蔓延し始めたため、感染拡大の防止を考え中止した。262名の参加が見られ、大変好評であった。来館者が知りたいことを飼育員が直接伝えられる良い機会であり、今後も継続を考える。

⑳ 大人向け講演会「こっそりのんびり回遊魚ハタハタの生態と漁業」（自主事業）

水族館や水生生物についてより深く知ってもらう事で水環境について考えてもらうきっかけとすることを目的に毎年度実施している。また、大人向けの生涯学習プログラムとしての位置づけでもある。今年度は、国立研究開発法人水産研究・教育機構 日本海区水産研究所の研究者による「こっそりのんびり回遊魚ハタハタの生態と漁業」の講演を行った。講演は非常に好評で、講演後の質問も多数あり、またアンケートでも参加者の満足度は高かった。

㉑ 講演会「研究者が語るイルカの話-イルカの眼から見える世界-」（自主事業）

水族館が鯨類の最新情報の発信場所となることを目的として、鯨類研究者による講演会で鯨類を調査研究してきた東海大学海洋学部海洋生物学科教授の村山司博士に講師を依頼し、「イルカの

眼から見える世界」というタイトルで講演会を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。

(5) 企画イベントの実施状況について

[総括]

- ① 2020年オリジナルカレンダープレゼント
毎年恒例のプレゼントとして、11月17日(日)から引換券を提示した先着1,200名へオリジナルカレンダーをプレゼントした。
- ② クリスマスツリー展示及び新潟青陵大学アカペラサークルによる点灯式
11月23日(土)から12月28日(土)の間、マリニピアホール(円柱水槽側)に高さ4.5メートルのクリスマスツリーを展示した。また、初日は地域連携の一環として新潟青陵大学アカペラサークルによる点灯式及びクリスマスミニライブを実施した。
- ③ 門松展示
1月2日(木)から7日(火)の間、正面入口に門松を設置した。
- ④ 新成人キャンペーン
1月5日(日)～19日(日)の間、成人式会場で配付したクーポン券チラシやスマートフォンなどで当館HPのクーポン券などを提示した新成人及び同行者1名を無料入館とした。また、館内レストランの割引クーポン券も併せて配付した。期間中、385人の新成人とその同行者328人が来館した。
- ⑤ 年間パスポート販売キャンペーン
1月6日(月)～2月11日(火・祝)の37日間、昨年度に引き続き、年間パスポート購入者へ館内ショップ・レストランで使用できる割引クーポン(大人500円分、小人200円分、幼児以下にはシール)をプレゼントした。クーポンの使用期限を2月28日までとし、期間中2,665人が購入し、一定の効果はあったが、昨年度の2,754人を89人下回った。
- ⑥ アクアラボ体験参加者キャンペーン
冬季の集客対策として、2月15日(土)～3月31日(火)の間、アクアラボ体験への参加者へノベルティ(ウェットティッシュ)をプレゼントした。しかし、2月29日(土)、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、アクアラボ体験を休止したことに伴い、同キャンペーンも終了した。

(6) 専門的な調査・研究等について

[総括]

「魚類等の繁殖・育成に関する調査」「鯨類の生理に関する調査」等、飼育水族に関する様々な調査研究を行っている。また、「漂着生物調査」「地域生物調査」等、野生水族に関する調査を行い、地域の自然史に関する知見の蓄積に努めている。

日本動物園水族館協会の会議や研修会へ出席し、積極的な調査研究成果を発表すると共に、最新情報の交換等を通して飼育技術の一層の向上を図っている。また、日本動物園水族館協会生物多様性委員会との協力体制を維持し、絶滅の危機に瀕している種の保存に努めるとともに、調査研究を行っている。これらの様々な研究の成果をホームページで公開する等、新潟における水辺の環境・水生生物についての情報の収集・発信基地としての役割を担っている。状況に応じて、特定外来生物が生態系に与える影響や、絶滅が危惧されている希少種についての情報を積極的に発信している。

日本動物園水族館協会の水族館技術者研究会では、「人工育成したアカムツの親魚養成技術開発への取り組み」について発表した。海獣技術者研究会では、「JAZA 水族館部の支援を受けたカマイルカの飼育下繁殖例」と「国内飼育カマイルカの遺伝的集団構造解析」(共同研究)とについて発表した。動物園水族館教育研究会では、「マスメディアを介した情報発信に教育普及効果はあるか」について発表した。日本鯨類研究協議会のトレーニングセミナーでは、「野生と危険：論文紹介及びまとめと提言」を発表した。日本野生動物医学会大会では、「胃癌のフンボルトペンギンの胃洗浄液の細胞診所見」を発表した。ちよ・生きもの発表会では、「マリンピア日本海のピオトープ 7年目のにいがたフィールド」を発表した。

他の研究機関との水生生物に関する研究も積極的に行った。さけ・ます等栽培対象資源対策事業の一環として、国立研究開発法人水産研究・教育機構日本海区水産研究所、富山県農林水産総合技術センター水産研究所と新規栽培対象種技術開発に関する研究を行い、アカムツの親魚養成技術の開発を担当し成果を報告した。

研究成果の公開も積極的に行った。ふくしま海洋科学館と共同で、水中カメラロボットによる日本海深海域の調査を行い、世界初となる野生下のアカムツ動画撮影成功についてホームページで紹介した。

生体入手の困難な種の飼育展示のための調査・研究でも成果を得た。日本海を特徴づける魚類の展示種数を増やす努力をし、地域の自然の情報発信に努めた。

生物多様性保全ネットワーク新潟が主催する「夏休み親子魚探検隊 2019」に協力し、水生動物相を調べ、在来生態系に悪影響を及ぼす外来生物の生息状況も明らかにした。タランペクラブの「シナイモツゴ勉強会」や「親子で川遊び -川の生き物観察会」に講師として参加し、水生生物について解説した。

今後も、より一層専門的な調査・研究に努め、その成果を市民へ還元していきたい。

(7) 総合学習等の受け入れ状況について

[総括]

文部科学省の提唱に基づく学習支援活動としての「総合学習」の受け入れを行っている。質問・インタビューを通して、子どもたちに生き物や環境に関する知識を伝える場となっている。また、職業に対する関心を高めることや、職業・職種の内容や働く意義について考えを深めることを目的とした職場訪問といった目的の総合学習にも対応している。

今年度は教育普及を専任とする部署が発足したこともあり、学校対応に力を入れた。9月には新潟市の中学校長会に参加し、当館での校外学習について広報した。新型コロナウイルスによる学校休校によるキャンセルがあったものの、例年よりも多い29校の校外学習に対応した。

来館した児童・生徒から、多数の礼状や感想が寄せられている。水族館や水生生物への関心を呼び起こす機会や環境保全について考える機会として、また、社会に目を向け、働くことや学ぶことの意義や大切さを理解していく場として非常に役立っていることから、今後も可能な限り受け入れを行っていきたい。

(8) 実習生等の受け入れ及び講師派遣の状況について

[総括]

実習生等の受け入れとして、専門学校生を対象に「飼育実習」、大学生を対象に「インターンシップ」「獣医実習」「博物館実習」を行った。これは、博物館類似施設としての一面を持つ水族館として、専門学校生・大学生に実習の場を提供するという社会的貢献の側面はもちろんのことであるが、指導を通じて職員の自己研鑽の場ともなっているので、今後も継続して受け入れを行っていききたい。

また、アウトリーチ事業の一環として、様々な「場」への講師派遣を積極的に行った。内容は、大きく分けて「野外での観察等の指導」と「教室(屋内)での生物や仕事についての講義・指導」であるが、対象が小学生から一般と幅広く、また、派遣先のニーズに合わせた内容にする必要があることから、派遣職員の指導者としての専門性が要求される取り組みとなっている。

毎年度継続して実施している新潟大学臨海実習については、海洋フィールドを題材にできる貴重な教育学習機会であることから、今後も継続して指導者を派遣していききたい。小中学校への講師派遣は、小学校への職業講話が4校、中学校への職業講話が2校であった。また、市内専門学校で展示・解説実践講座を実施した。

今後も、実習生受け入れやアウトリーチ事業を地道にそして積極的に行っていくことが、水族館と地域・社会とのつながりを強固にし、広げていく基礎となると考え、継続していききたい。

(9) 市民ボランティアの活動の状況について

[総括]

ボランティア活動の目的を大きく「水族館(専門家)と来館者(非専門家)をつなぐ役割」「生涯学習の場」「自己実現の場」の3つとして活動をサポート、コーディネートした。今年度は5月に新規募集をおこなった。新たに3人のボランティアを迎え、総勢79人となった。

活動状況は活動日数139日(平成30年度=193日)、活動延べ人数390人(平成30年度=717人)であった。昨年度に比べて日数・活動人数共に減少しているが、これは、昨年度末(2019年3月)に継続の意思確認を书面で行ったことでボランティア数が109人から79人へと減少したこと、2月頃からの新型コロナウイルスの感染拡大による自粛意識、新潟市で感染が確認された2月29日以降の活動自粛が主な原因と考えられる。なお、この影響で3月に予定していた総会と他園館視察を実施できなかった。

今年度の活動の柱として「館内案内」「いきもの教室等館内のイベント補助」「アンケート調査」「研修」「磯の体験水槽解説」を設定して実施した。特に「磯の体験解説ボランティア」に関しては、5年目となり認定者人数も増えたため、ゴールデンウィークおよびお盆の多客時はローテーションを組んで積極的に活動をしてもらい、展示生物の損傷減少と来館者への教育普及に大きく貢献していただいた。

令和2年度もしばらく新型コロナウイルスの影響が続くことが予想されるため、ボランティアのモチベーション維持の工夫を考え、水族館・来館者・ボランティアの3者が満足できる活動を推進し、この困難な時期を乗り越え持続的なボランティア活動を目指していききたい。

(10) 広報および広告宣伝について

今年度の広報および広告宣伝について、上越市立水族博物館「うみがたり」の影響を考慮し、長野県への広告を全て止めて、群馬・埼玉への広告強化にシフトした。また広告媒体は、従来のテレビ・ラジオ・雑誌に加えインスタグラム広告も新たに実施した。新型コロナウイルスの影響が出る前の、4月から2月までは、入館者が前年度比103.3%と一定の広告効果はあったと思われる。

① テレビ CM とラジオ CM

テレビ CM は、通常 CM として、新たに「いきものカード」シリーズを制作し放映した。また、1 月は年間パスポートの購入促進として、キャンペーン告知のCMを放映した。放映構成として、新潟は通年の固定 CM と GW・夏休み・春休みへの集中スポット CM とTeNY「わくわくマリニピア」、福島・山形は夏休み・春休みへの集中スポット CM を実施した。

ラジオ CM は、FM新潟、FMポート、FM 群馬で放送した。放送構成として、FM 新潟は年間を通して毎月 2 回、夕方の FM 新潟「サウンドスプラッシュ」内で職員が生出演して旬な情報を提供した。FM ポートとFM群馬は、夏休みに集中スポット CM を実施した。

② 雑誌・新聞などの紙媒体への広告

雑誌は、知名度が高い年刊誌(全国誌)及び県内の月刊誌(子供の遊び場特集)へ継続掲載した。また、新聞は、新潟日報へ全面フルカラーで掲載し、福島・山形・群馬には地方紙への掲載を行った。

③ WEB

オウンドメディアへの展開としては、当館ホームページ、Twitter、LINE@、Facebook、Instagram などの更新をより頻繁に行うことで、情報の拡散に努めた。また、ホームページのリニューアル後は、現場の飼育スタッフによる Twitter アカウントを新設し、今まで以上にタイムリーな生物情報の発信に努めた。

また、有料 WEB 広告として、Instagram 広告を実施した。新潟、福島、山形のほか、今まで広告展開が困難であった(広告費が高いため)、群馬・埼玉(関越線エリア)への広告も実施した。

④ プレスリリースなど

プレスリリースは、各イベント・生物情報を積極的にを行い、実際に取材に結びつくものが多かった。特にカマイルカの出産のリリースは、当館でも初めての事例でもあり、話題性が特に高かったため多くのメディアで取り上げてもらった。

その他にも「広告料」を必要としない誘客・宣伝活動も「広報」の一つとして位置づけており、その主なものとしては、小学校に直接配送するチラシを今年も実施し、新潟、福島、山形に加え、群馬にも配送した。また、館外で行う生物展示や解説・クイズなどの出張展示も積極的に行った。

(11) 他園館との協力について

[総括]

のどしま臨海公園水族館、ふくしま海洋科学館、尖閣湾揚島遊園水族館、神戸市立須磨海浜水族園、志摩マリランド、市立室蘭水族館、東海大学海洋科学博物館、鶴岡市立加茂水族館、アクアワールド茨城県大洗水族館、魚津水族館と魚類等の生物交換を実施した。

しながわ水族館、神戸市立須磨海浜水族園、下関市立しものせき水族館、札幌市円山動物園、市原ぞうの国、よこはま動物園、飯田市立動物園、いしかわ動物園、福山市立動物園とプリーディングローンを行っている。

鶴岡市立加茂水族館、ふくしま海洋科学館、のどしま臨海公園水族館と共同で調査・採集活動を実施した。

鴨川シーワールドでカマイルカの出産を見学した。

視察・研修として、島根県水産技術センター2名、三重大学3名、上越市立水族博物館1名、長岡市寺泊水族博物館1名、穴道湖自然観ゴビウス1名、東京大学三崎臨海実験所1名を受け入れた。

市民ボランティア活動として毎年実施してきた他園館視察は、今年はアクアワールド茨城県大洗水族館への訪問を予定していたが、新型コロナウイルス感染防止のために中止した。

(12) 年間入館パスポートについて

[総括]

今年度の年間パスポートの購入者は、13,905人(総入館者の2.7%)、パスポート利用者(購入者+リピーター)は85,019人(総入館者の16.7%)となった。また、パスポート利用者の平均入館者数は6.1回であった。

購入者数は、3月の新型コロナウイルスの影響があり、過去最多であった昨年度の14,235人から330人減少した。しかし、入館者総数に占めるパスポート購入者、利用者の割合は年々増加傾向にある。昨年度に引き続き、館内外で積極的に広報したことや口コミによるお得感などが増加に繋がっていると考えられる。特に、購入者へ館内のレストラン・ショップで使用できるクーポン券をプレゼントする「年パスキャンペーン」を実施した際は期間中多くの方にご購入いただき、キャンペーンが来館のきっかけとなり、多くの市民にとって年間パスポートへの需要が潜在的にあることが改めて伺えた。今後も話題提供や特別展示などの情報提供を行い、年間パスポート会員に繰り返し来館していただくことが入館者増に繋がると考えられる。

アンケート調査での「生き物の展示」について95.4%の人が「非常に満足」「満足」と回答しており、テーマや季節感に沿った特別展示などを行い、生物の変化を発見できたことが評価されたと考えている。他にも「いつも楽しく回ってます」「雨や天気の悪い日など利用しやすくてうれしい」「いつもたのしく子供たちと来れます」「気軽に来れて楽しめています」などの声もいただいている。

また、「次回パスポート購入予定は」との問いに対しては、「購入の予定なし」と答えた人が2.7%で、85.5%の人からは「購入したい」と回答してもらうことができた。

今後も、生物の成長や変化が体感できる展示等を心掛け、リピーターに十分満足してもらえるようになっていきたい。

(13) 市・他団体等との協力

[総括]

令和1年度に行政や他団体等と協力して実施した事業は以下のとおりである。

水族館の集客力アップや安心・安全強化のため、他施設・他団体との協力が不可欠であり、指定管理者だけではなしえなかったサービスを展開できたと考えている。多くのお客様から楽しんでもらい、満足してもらえたと思う。今後も、積極的に機会をとらえ、他団体や民間の持つ多様なチャンネルを活かした事業に取り組んでいきたいと考えている。

① 新潟開港 150 周年記念 南極の氷展示

5月16日(木)・22日(水)・23日(木)、新潟市の施設として「新潟開港 150 周年記念事業」の開催趣旨に賛同し、本館出口付近に南極の氷を展示した。新潟開港 150 周年を記念して新潟東港に寄港した南極観測船・砕氷艦しらせが持ち帰った南極の氷を展示し、来館したお客様は大変興味を持ち、「見て」「触って」を体験していただいた。

② Niiport フェスタ 2019 出展

7月27日(土)新潟開港 150 周年記念事業の一環で行われた Niiport フェスタ 2019 に出展した。場所は万代島多目的広場(大かま)で実施され、夏休みの開催ということもあり、当日は多くの方がイベントに参加された。水族館の出展ブースでは、水族館の採集活動を紹介し、段ボール製の活魚輸送車の模型の展示などを行った。多くの方に見ていただき、水族館の普段の活動を知ってもらう良い機会となった。

③ 新潟青陵大学 青空祭に出展

10月26日(土)・27日(日)地域連携の一環として新潟青陵大学の青空祭に出店し、生物帽子の配布、ショップの水族館グッズの販売、レストランによる軽食販売を行った。

④ 新潟市中央卸売市場「市場まつり」に出展

10月20日(日)に新潟市中央卸売市場で開催された「市場まつり」に出店し、クラゲ水槽、活魚輸送車の展示解説と見学、クラゲクイズを行った。事前に用意していたクイズシート 200 部では足りず、急遽 150 部を増刷するほど盛況であった。

⑤ アルビレックス新潟 「科学教室」に出展

8月17日(土)にビックスワンで行われたアルビレックス新潟「科学教室」では、ミズクラゲ、ヤドカリ、メダカを展示して、その生物を観察しながらクイズを実施した。また、触りながら生態を知ってもらう、にぼしの解剖も行った。天候が良かったことと、生体展示や体験型イベントを実施したため、多くの来場者から参加してもらった。

⑥ にいがた環境フェスティバル 2019 に出展

11月10日(日)万代島多目的広場(大かま)で開催された、新潟県主催「にいがた環境フェスティバル 2019」に出展した。出展ブースでは、ミズクラゲや新潟県内で見られる淡水生物の生体展示、当館での希少淡水魚の保全についてのパネルを展示した。また、セミナーブースで午前と午後の 2 回「生きものクイズ」を実施した。会場全体で約 3,000 人の入場者があったが、当館の展示ブースはメイン入口・総合案内の隣であったことから多くの入場者が立ち寄ってくださった。

- ⑦ アクアマリンふくしま合同出張展示：イオン郡山店
10月6日(日)ばんえつ発見の旅サポートに加盟する施設が、イオン郡山店で各施設のブースを出展した。当館は、イルカの出産の映像を流すとともに、生物の帽子とパンフレット及び割引券を配布した。
- ⑧ 体験教室型イベント「だいしほくえつアカデミー」
8月27日(火)①10:00～12:15、②14:00～16:15(同プログラムを2回)に団体休憩室で表記イベントを実施した。この「だいしほくえつアカデミー」は第四銀行の社会貢献活動として2013年より実施しているものを前身とし、今年度から第四北越フィナンシャルグループの事業として継承されたもので、子どもたちがさまざまな分野のプロから学ぶ授業を企画実施している。2019年度は10のプログラムがあり、当館はその中の「いきもの」のプログラムを実施した。
事務局(第四銀行)からSDGsの目標14(海の豊かさを守ろう)に関連したプログラムという希望があったため、「「しいくのウラがわ」から海の環境を考えよう!」というワークショップ型の環境教育プログラムを小学4年生～6年生32人(2回の合計)に行った。
- ⑨ 新潟広域都市圏連携事業「文化・観光施設共通割引券」の導入
新潟広域都市圏連携事業「文化・観光施設利用促進」により、「文化・観光施設共通割引券」を実施した。新潟市だけでなく広域都市圏の方も割引で入館でき、2,540人のお客様が来館された。
- ⑩ 新潟大学医歯学総合病院 小児病棟へのお出張プログラム
7月3日(水)新潟大学医歯学総合病院小児病棟での出張展示を行った。ミズクラゲ・キタノメダカ・ヤドカリの生体展示を行い、密閉容器に生体を入れて個室管理の患児へも見せた。
- ⑪ 一般社団法人日本自動車連盟(JAF)会員割引
全国的な自動車ユーザー団体である一般社団法人日本自動車連盟と連携し、会員に対し当館のPRを行い、会員証提示で割引を行った。入館促進が図られ、29,564人のお客様が来館された。
- ⑫ NEXCO「新潟・北信濃・会津 週末フリーパス」利用者へのお入館料割引
ETC車限定の新潟県内及び長野県北信濃地方・福島県会津地方のエリア内で、休日を少なくとも1日含む連続する2日間が高速道路乗り降り自由という内容で、申し込み画面を提示すると優待施設で割引のサービスが受けられるという企画に参加し、172人のお客様が来館された。
- ⑬ 内閣府が実施する「子育て支援パスポート事業」への協賛
内閣府の社会全体で子育て世帯を応援するという趣旨に賛同し、全国共通展開する「子育て支援パスポート」事業に協賛し、当該事業の会員に対し割引を行った。14,084人のお客様が来館され、新潟の観光促進と当館の入館促進が図られた。
- ⑭ 水族館で潟普請
昨年からはじめたプログラムであり、当館の「にいがたフィールド」の砂丘湖やため池を活用し、昭和

初期まで新潟の各地で行われていた潟普請を再現し、その必要性や当時の田んぼや水環境などを体験しながら紹介することを目的としている。歴史的な紹介は新潟市歴史博物館の学芸員にお越しいただき当館と一緒に体験し、解説をする方法をとっている。本年は昨年の反省を生かし、午前中はため池での泥上げ体験や砂丘湖でボートを使用した草刈り・草上げ体験、午後からは「にいがたフィールド」で展示している生物の紹介と歴史的な講義を予定し、9時30分から15時までの1日プログラムとした。当日は午前中の天候不順により、午前と午後のプログラムを入れ替えて行ったが、歴史的な背景や行うことの意義を知ってから体験する流れは良かった。やはりこのプログラムは水族館での体験と博物館の講師による講義を合わせることが重要で、意義のある内容となっている。ただ有意義で楽しいプログラムであるが参加希望者が少ない。今年度は4年生以上に年齢を引き下げたが、効果はなかった。やはり「潟普請」というタイトルがわかりづらいことが一要因であると考え。令和2年度の開催予定はないが、令和3年度はタイトルを見直し、今年と同様に新潟市歴史博物館と協力し、多くの参加希望者と開催したい。また同時に経年的な実施で、田んぼや砂丘湖にどのような変化をもたらすか、水族館として注目していきたい。

⑮ 「公共建築の日」イベント開催の協力

11月11日(日)広く公共建築について、理解と関心を持ってもらうことを目的に、新潟市公共建築第1課が主催するイベントに新潟市の公共施設として協力した。毎年実施しているイベントで今年は国・県・市との合同での開催となった。当日はバックヤードツアーを行い当館スタッフが3班に分かれ2回実施した。全ての回で定員を満了し、多くの方が関心を持ってバックヤードを見学された。その他、券売前のアプローチ棟でのパネル展示や、団体休憩室では積み木イベントを実施した。今後も様々な形で国・県・市と連携を図っていききたいと思う。

3. 入館料収入の実績について

令和1年度入館料収入 432,686,238円

[総括]

入館料の徴収事務については、協定書に基づき適切に実施した。

今年度の入館者数は509,286人で、前年度の518,980人から約9,694人減少した。それに伴い、入館料収入でも432,686,238円で前年度の435,703,446円から3,017,208円減少し、対前年度比99.3%となった。客単価は849円であり、前年度の839円から10円上がった。入館者数同様、今年度はゴールデンウィークの10連休、冬期の暖冬・少雪により2月末時点で対前年度比103.4%と上回っていたが、3月の新型コロナウイルス感染拡大の影響により入館者数が激減し、入館料収入も最終的に昨年度を下回った。

収入増対策としては、ゴールデンウィークや夏休みの学校の長期休業に合わせ、新潟市内の幼稚園・保育園、新潟市外県内、山形、福島、群馬の小学校へ割引券付チラシ(提示で1組全員2割引)を配布した。また、昨年度同様12月には冬場の閑散期対策として新潟市内の小学校、幼稚園・保育園に同様の割引券付チラシの配布などを行った。実施期間中、割引券チラシを利用したお客様が多くみられ、一定の収入があり、観光客の来館動機付けに一定の効果があったと考えられる。

一昨年導入した全国共通展開する「子育て支援パスポート事業」では、14,084人のお客様にご来館い

ただいた。前年度の 9,302 人から約 1.5 倍増え、周知が広がり多くのお客様が来館されたと思われる。今後、新潟市内のお客様については年間パスポートへの移行を期待したい。

また、リニューアル後導入した大手コンビニエンスストアのオンライン端末機で入館チケットが購入できる「コンビニチケット販売」や、同じくリニューアル後導入した、会員証の窓口提示で 5 人まで 2 割引となる「JAF カード割引」も継続して実施している。

入館料の免除については、新潟市水族館条例・施行規則に基づき適切に実施した。今後も来館する幼稚園・保育園、小学校、老人施設、福祉施設などが増え、質量ともに負担のかかる業務になることが予想されるが、団体休憩室の予約など状況を把握し不備のないよう行っていきたい。

4. 管理経費等の収支決算について

[総括]

必要な物品購入や委託、修繕工事等を十分に精査し経費削減に努めた。

人件費は、昇給に伴い増加傾向であるが、その他の管理経費は、経費削減に努め予算の範囲内で管理運営を行うことができた。

海水取水設備においては、取水先端部海底面上昇により取水口付近の着砂が進行し、取水口の埋没が懸念されたことから、平成 27 年度より新潟市と協力しながら対応を行い、恒久対策としての取水管 200m 延長工事が平成 30 年度に完了した。これにより、冬期の海水着水槽の植物片の流入がなくなり、延長前に実施した大型吸引車を使った除去作業を行わずに済んだ。ただし、水族館の生命線である海水取水設備であることから、水族館と施工業者が密に連絡を取り協力しながら、毎年の保守点検等で今後も注視していかなければならない。

経費が嵩む工事費については、リニューアル工事で未着手だった建物・設備箇所のほか、リニューアル工事で更新した建物・設備についても、不具合が生じてきており、その都度修繕工事を行ってきた。一方で、経費を抑えるための対策として、昨年に引き続き光熱水費の夏場の最大電力を抑えるため、設備の間欠運転や、空調の設定温度を上げるなど積極的な節約を行った。その他にも周辺道路・駐車場の警備員を実態に沿った人員配置や、特別展の会場設営を出来るだけ自前で行うなど経費節減に努めた。

また、平成 27 年度末に導入した活魚輸送車については、魚類搬入に際し計画的に活動を行った。魚類購入の際、業者に依頼することなく自前で多くの魚類を購入・運搬することが出来たことから、経費削減に貢献することができた。

工事については、不具合による修繕工事費が依然として嵩んでいることから、来年度も大規模修繕が発生した場合や不具合が予想される場合は、市と相談しながら行っていきたい。

次期指定管理期間も「最小コストで最適な管理」を目指し、かつ、お客様への快適なサービス提供を図るという基本原則に則り水族館の運営を行っていきたい。

5. 最後に

今年度の入館者数は、509,286 人(対前年度比 98.1%)、入館料収入は、432,686,238 円(対前年

度比 99.3%)と、昨年度と比較し共に減少した。事業計画書で掲げた入館者数目標値の 525,000 人、入館料収入目標値 474,582,000 円にも及ばなかった。2 月末時点では前年度比で入館者数が 103.3%、入館料収入が 103.4%と共に上回っていたため、このまま推移すれば入館者数は 536,000 人、入館料収入は 450,517,000 円に達すると予想されたが、新型コロナウイルスの影響により共に昨年度を下回る結果となってしまった。

昨年同様行った「年パスキャンペーン」をはじめ、多くのお客様に年間パスポートを購入していただき、お得感から年間パスポートに対する購入意識は依然として高かった。3 月の新型コロナウイルスの影響がなければ昨年度を上回ったと思われる。また、団体や個人入館券での入館者増が入館料収入や客単価を上げることから、今後も県外からのお客様を増やせるよう努めていきたい。

リニューアルオープン後の入館者数では、6 年連続で 510,000 人を超えていたが、新型コロナウイルスの影響により最も少ない入館者数となった。入館料収入では入館者数 447,512 人であった平成 20 年とほぼ同じ水準であった。

入館者の満足度については、アンケート結果によれば、展示生物全般で、「非常に満足」と「満足」の計が 96.4%、イルカショー、解説プログラムで「非常に満足」と「満足」の計が 91.5%と今年度も満足度は依然として高水準を保ち、多くのお客様に喜んでいただいていると思われる。

また、年間パスポート会員を除くお客様の来館回数については、「はじめて」が 35.3%(前年度 33.5%)と昨年度と比較し増加した。年数が経つにつれ「はじめて」が減ることは当然であるが、県外からのお客様は「はじめて」が全体の 66.1%と最も多く、県外へ宣伝を行った効果もあり、まだ来たことがない観光客が潜在的に多いことが伺える。一方、新潟市内のお客様で多くは複数回来館されており、「はじめて」は年々減少しているが、転勤等の理由で新潟市内へ引越された方が含まれているのではないと思う。来館回数 4 回以上は全体の 67.7%と圧倒的に多く、当財団が掲げるビジョン「新潟で一番愛される施設」を心がけたことがこのような結果に繋がったと思われる。今後も、いつも来ても新鮮味のある展示に努めることで年間パスポート購入者の増加、さらにリピーターとして何度も足を運んでいただくことで入館者数増に繋げ、新潟市民に還元したいと考えている。

施設については、リニューアル工事の対象外であった箇所でも突発的な不具合が依然として生じている。またリニューアル工事を行った箇所でも徐々に不具合が生じ、件数も増加傾向にある。今後も十分考えられることから、工事未着手の箇所に限らず、全体的に注意深く維持管理すると共に、設計会社が提案した修繕計画に基づき新潟市と相談し、早めの対応で不具合による事故が起こらないよう努めたい。

また、駐車場は、平成 28 年 3 月に水族館協の土地を整備し駐車場として 56 台増設したことで、繁忙期には周辺駐車場の回転が良くなった。また、周辺施設の協力により繁忙期の周辺施設が利用しない日に限り駐車場を借用している。一時的に飽和状態になる場合があるが、従来の駐車場不足は十分解消されて周辺道路の渋滞もほぼ見られない。海岸側臨時駐車場(ブロックヤード)の管理については、水族館のお客様以外の駐車車両が多く、指定管理者単独による管理は非常に困難になってきている。海岸側臨時駐車場からの道路の横断について、交通信号がなくお客様の安全が確保できないことが懸念されていたことから、繁忙期に警備員 1 名を配置させた。

水族館を運営する上での重要な取水設備は、国土交通省の養浜工事の進展により、沖合 200mの取水口付近の海底面の上昇が経年的に進行していたが、平成 30 年度に完了した延長工事により、現時点で危機的状況を回避できている。しかしその他設備、特に水管橋は劣化が著しいため、新潟市と協議を行いながら早急に対応したい。取水設備は水族館の生命線である海水を調達するための重要な設備であることから、今後も注視していきたい。

ソフト面については、従来のイルカショーやマリンサファリ給餌解説に加え、アクアラボ体験プログラムや

磯の生きもの解説など体験型プログラムを充実させている。また、定期的を実施した「にいがたフィールドガイド」や、「育成室開放」「イルカバックヤードミニガイド」、閑散期には「いきもの絵本読み聞かせ会」や「フォトコンテスト受賞作品展」などを実施した。今年度は7月29日、新潟市水族館として初めて飼育しているカマイルカが出産した。これに伴い7月26日～8月1日の間、イルカショーを中止した。特に影響は見られず、事前に周知していたこともあり、当日来館されたお客様からはご理解いただいた。その後、8月29日から時間を限定し、カマイルカ親仔の一般公開を行った。話題性から週末を中心に多くのお客様にご覧いただけた。

高病原性鳥インフルエンザ対策について、12月19日、阿賀野市で回収されたヒドリガモの死体の鳥インフルエンザ簡易検査で陽性結果を受け、ペンギン舎に防鳥ネット設置した。後の確定検査で結果は陰性であったが、防鳥ネットは2月末まで設置した。念のため職員駐車場入口に消石灰の散布(タイヤ消毒)の対策を行った。今後も渡り鳥が飛来する時期は様々な方向から情報を集め、周辺地域で発生した場合は、マニュアルに沿った対応・対策を行い、来館者、職員、飼育生物を鳥インフルエンザから守ることを最優先に考え被害の防止に努めたい。

WAZA(世界動物園水族館協会)からの残酷であるとの指摘により、和歌山県太地町でのイルカ追い込み漁からイルカ入手が困難となっている問題については、引き続き JAZA(公益社団法人日本動物園水族館協会)及び令和1年11月に設立された JAA(一般社団法人日本水族館協会)と協議しながら様々な可能性を探っていききたい。

財団については、平成29年3月に公益財団の認定を受け、平成29、30年度の2年間の新潟市開発公社との共同事業体として指定管理者の指定を受け管理を行った後、令和1年度より新潟市海洋河川文化財団が単独で5年間の指定管理者の指定を受けた。水族館運営を行いながら、法人としても健全な経営ができるよう努めていきたい。

今年度は新型コロナウイルスの感染拡大により状況が一変した。2月29日、新潟市内で感染者が確認されて以降、入館者が激減し、開催イベントの中止や解説プログラムの休止、お客様が接触するエリアを閉鎖するなどの対策を現在も行っている。令和2年度は新潟市水族館 開館30周年の記念の年であり、様々なイベントを計画している。多くの方々に30年間積み重ねてきた数々のチャレンジをご覧いただき、様々なイベントにも参加をしていただきたいとのスタッフの強い思いもあるため、新型コロナウイルスの終息する見通しが立たない中、事業の内容、開催の有無について検討が必要となってくる。

新型コロナウイルス感染拡大が依然として続いている状況ではあるが、新潟市水族館としては今後もさらなる魅力づくり目指し「水族館業務を行う専門家集団」として平成2年の開館当初から培ってきた豊富な知識と経験を生かし、多くのお客様から喜んでもらえるよう、スタッフが一丸となって頑張っていきたい。